

表紙地図紹介 『最新熊本市街地図』 1937年（昭和12）

今回は昭和12年（1937）発行の、戦前の都市の様子が読み取れる最新熊本市街地図を取り上げます。熊本市は昭和20年7月1日と8月10日の大空襲などで中心市街地をはじめ市街地面積の30%が焼け野原と化し、終戦後の戦災復興都市計画により道路の体系、街区の形が変わり、地図を書き変えるほどの市街地の変更を余儀なくされました。しかし、あまり変わらなかったのが河川です。街の中央を流れる白川のほかに熊本城の東を流れる坪井川と西を流れる井芹川を皆さんご存じでしょう。大正末期から昭和初期の大洪水を経て、井芹川・坪井川の改修が行われました。具体的に地図を読んでいきましょう。

井芹川の改修は昭和6年から10年の期間に行われました。上熊本駅の西側から直線状に付け替えられ島崎付近で分流し西方へと流れ、地図からは外れた上高橋で坪井川と合流。この6.4kmにわたる新たな流路が現在の井芹川です。この地図では元の流路（上熊本駅南西側の蛇行～北岡自然公園付近で坪井川と合流する旧井芹川）も確認できます。旧井芹川の一部は、雨水排水路として今も使用され、熊本市の熊本水遺産に登録されています。

坪井川は、当時、宅地化が著しい流域から流れ込む生活排水を処理する役割も担っていたため、その改修は、洪水対策のみならず平時の衛生面の向上も目的としていました。地図上では熊本城の北西に、現在と同じ直線状の流路と元の蛇行した流路（旧坪井川）の両方が見られます。新しい流路は旧水堀を掘削し新たな本流としたものでした。また、京町台東裾を蛇行する旧坪井川は、現在も錦橋付近まで目にする事ができ、これより上流側は暗渠となり上部は道路になっています。旧坪井川の一

部は雨水排水路として今なお使用されています。なお、この旧坪井川はボーリング調査などから加藤清正公による人工河川であることが分かっています。

このほかこの地図では、古城堀（昭和28年に6.26水害の廃土を埋立て、現在、古城堀端公園となり熊本水遺産に登録）や、熊本駅西側の春日射的場、その南側に田崎競馬場（昭和18年に食糧増産のため水田化）、整備途上の軍用道路（現産業道路：熊本駅から泰平橋通りとの交差点まで完成）も確認できます。



【参考文献】
熊本市『新熊本市史 通史編 第7巻 近代Ⅲ』平成15年3月
熊本市都市局『熊本市戦災復興誌』昭和60年3月
土木学会誌 第二十巻第四号い報「坪井川改修工事概要」昭和9年4月
環境新聞社『月刊下水道』2009年9月号 歴史探訪 清正公下水道
(研究員 荒木 新吾)

第9回講演会のお知らせ 講師：千賀 裕太郎氏（東京農工大学名誉教授）

【演題】子どもが地域愛を育むプロセス ～まちづくり・地域活性化原論として～

今日ほど地域で、子どもの育ちの環境がなおざりにされている時代はありません。子どもが健全に成長するには地域の「人・自然」との濃い接触が必要です。その中で豊かに育てられた子どもは、地域への愛を育み、やがて地域づくりを担う大人に成長するのです。実は、日本列島ほどこうした条件に恵まれた地域はありません。「まちづくり・地域活性化」のありかたを「子どもの成長」を原点にして、じっくりと考える機会にしたいと考えています。



日時：平成26年8月12日（火）午後3時～（2時間程度）
場所：熊本市国際交流会館7階ホール
定員：200名（先着順、参加費無料）
※申込みはひごまるコールまで（096-334-1500 / higomaru-call.jp）



熊本市都市政策研究所ニューズレター 第5号 2014年（平成26年）7月

【編集・発行】熊本市都市政策研究所

〒860-8601 熊本市中央区手取本町1-1 熊本市役所本庁舎13階 ☎096-328-2784

宝くじの収益金は公共事業等を通じて社会に貢献しています。

E-mail: toshiseisakukenkyusho@city.kumamoto.lg.jp ホームページはこちら

熊本市都市政策研究所

検索

IPRK

Institute of Policy Research, Kumamoto city

熊本市都市政策研究所ニューズレター 第5号 2014年（平成26年）



昭和12年『最新熊本市街地図』（熊本県立図書館所蔵）※ 原本の地図に、一部施設名などを加筆しております

〈第8回講演会報告〉

「生涯現役社会づくり」

特定非営利活動法人アジアン・エイジング・ビジネスセンター理事長 小川 全夫氏

〈IBA アカデミー会議 ―都市政策研究所長 講演報告―〉

「都市再デザインの時代」

活動報告

学会参加報告

表紙地図紹介

第9回講演会のお知らせ

第8回講演会報告（要旨）

■第8回講演会

期日 平成26年5月22日

場所 熊本市国際交流会館7階ホール

「生涯現役社会づくり」

講師：小川 全夫氏

（特定非営利活動法人アジア・エイジング・ビジネスセンター理事長）



これからの日本社会は、「若者が社会を支える」という基本的な構図が維持できなくなってくるため、「生涯現役」をキーワードとした仕組みを作っていくことが重要になる。人口構造が変化するという事は、社会の仕組み自体を変えていかなければならないことを意味しており、若者の数が減少する一方で高齢者が増加していくという事は、「若者だけでなく、高齢者であっ

※講演会要旨の文責は、ニューズレター事務局です。内容の詳細は、都市政策研究所ホームページに掲載しています。

ても社会を支える」という構図への移行が必要である。そのような社会のことを「生涯現役社会」という。

日本には高齢社会対策基本法があり、具体的な数値目標を設定した取り組みが行われつつある。国が定めた大綱が実現されるか否かは、地方自治体が生涯現役社会の諸問題を認識して、どのような努力をしていくかにかかっている。さらに、自治体だけでなく住民自身も、どのように自分の将来像を描くかも非常に重要である。

高齢者の居場所と出番がある地域づくりには幾つかのモデルがあり、例えば「自給地モデル」として「青空市」や「道の駅」がある。また「劇場モデル」としては「都市農村交流」という仕組みがあり、1990年代には「定年帰農（都市の住民が定年後に農村で農業を営む）」という動きに繋がった。さらに、都市と農村の交流は、徳島県神山町における「サテライトオフィス」などの仕組みづくりへと発展していった。

生涯現役社会実現のために重要な考え方として「レジリエンス（回復力）」がある。人間には、たとえどんなに苦しい状況に陥ったとしても、そこから回復しようとする力が備わっているという概念であり、今後の生涯現役社会に向かって様々な仕組みを作っていくためには、レジリエンスを引き出すことが重要となる。

IBA アカデミー会議 —都市政策研究所長 講演報告（要旨）—

ハイデルベルク市が開催する「知識に基づいた都市形成会議（IBA（国際建築博覧会）アカデミー会議）」に出席し、荻茂壽太郎都市政策研究所長が「都市再デザインの時代」と題し、本市の都市計画の歴史や本市における知識基盤型アーバニズムの取り組みを紹介した。

日程 平成26年3月21日～22日

場所 ドイツ・ハイデルベルク市（熊本市の友好都市）

『都市再デザインの時代』

熊本市は1889年に誕生した時点では小さな都市であったが、現在までに19回の合併を繰り返すことによって約73万人の人口を擁する大都市へと発展し、2012年には20番目の政令指定都市となった。知識基盤の都市という観点で見れば、熊本市内には11の大学が立地しており約26,000人の学生が様々な分野の専門知識を学んでいる。

熊本市の近代都市計画は124年の歴史を持つが、加藤清正による城下町建設から数えるならば400年以上の古い歴史がある。1896年に夏目漱石が来熊した際には、熊本市を「森の都」と呼んだことが知られている。姉妹都市たるハイデルベルク市も「City of Forest」と呼ぶに相応しい都市である。

熊本市では、1930年に都市計画法の適用によって風致地区が設定され、それに基づいて郊外緑地計画が策定された。風致地区とは市内における緑地帯を意味しており、都市開発が無秩序に拡大することをコントロールするという役割を果たしてきた。江津湖も風致地区の一つで、当時、国の公園緑地の専門官であった北村徳太郎氏が提示した公園計画によって、開発の波から守られたのである。

日本の都市計画の歴史において、当初は「都市開発・建設（Urban Development）」が行われ、その後、日本の多くの都市において「都市の再開発（Urban Renewal）」が求められた。しかし、今後の都市計画は「都市の再デザイン（ReDESIGN the City）」という発想が必要になってくる。

熊本市における都市の再デザインを展望する際に重要なポイントは、「自然資源」「文化的資源」「歴史的資源」に対して責任を持つことである。つまり、自然と共にデザインし、自然との関係を重視しながら、「Studying the past to learn new things（温故知新）」という態度で臨まなければならないということである。現在、熊本市は様々な分野で新ブランド創造に取り組んでいるが、そこでも「自然」「文化」「歴史」は重要な要素となる。

熊本市内に立地する11の大学では、自然科学から社会科学まで幅広い分野を網羅しており、そこで蓄積された多くの知見が将来の熊本市再デザインに活かされている。現在進行中の中心市街地再デザインのコンセプトである「熊本城と庭続き（Extension as part of the Castle Garden）」は、江戸時代に描かれた「陽春庭中之図」から学んだ結果である。過去の地歴を大切にしつつ中心市街地を再デザインするという意図が、このコンセプトの中に込められている。



日本公共政策学会2014年度研究大会 参加報告

2014年6月7日から8日にかけて高崎経済大学で開催された日本公共政策学会2014年度研究大会において、「地域共有財の保全活動における民間企業と行政の連携」というタイトルで熊本地域の地下水保全事業について報告しました。この事業は、「地下水の保全」という目的を共有する11市町村や民間企業、白川中流域地元農家などが、明確な役割分担に基づいて体系的に事業を展開している点が高く評価されている事業です。特にウォーターオフセット事業では、地下水保全事業の持続性を担保しつつ民間企業の参入を促進させる可能性を持っています。課題としては、事業モデルに更なる持続性を持たせるために流通業者や消費者をモデルに組み込むことが必要であり、あわせて熊本地域の地下水をブランド化することでマーケット評価を高めることが求められると考えられます。

（研究員 渡辺 亨）

■都市政策研究所活動報告 - 第7回講演会事後研修 美里フットパス体験会 -

都市政策研究所では、「観光まちづくり」をテーマに開催した今年2月の第7回講演会の事後研修会として、5月17日（土）に「地域の宝の探し方や磨き方、それを活かしたまちづくり」をテーマにした美里フットパス体験研修会を開催しました。

フットパスとは自然や史跡などを巡って楽しむイギリス発祥の山里歩きのことですが、「美里フットパス」では、昔から残る山と川、棚田などの風景の中を、地元の人達との触れ合いも楽しみながら歩きます。美里町では平成23年から取り組みが始まっており、「地域を元気にする魔法」として全国から注目を集めています。

今回の研修会では美里フットパス協会運営委員長の井澤りり子さんに講師をお願いしました。講義の中では、フットパスを特別なイベントにするのではなく、地元で「できること」を「できる人」がすることが継続の秘訣であること、また地域外から多くの人を訪れることで人との交流も生まれ、地元の人々の地域に対する自信と自覚にもつながるなどの話がありました。

フットパス体験では、石橋で有名な霊台橋から出発し、樹齢100年のいちい榎の残る竹の迫神社に立ち寄り、元豊富小学校だった『筒川荘』で昼食をとりながら地元の方々のお話を伺い、約4.5kmのコースを歩きました。

フットパス終了後の講義では、講師の井澤さんから、手を加えないありのままの資源を活用することが重要との話がありました。

